

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520822

 研究課題名（和文） シャン民族の仏教実践における口承—書承関係についての
文化人類学的研究

 研究課題名（英文） Anthropological Study on the Relation between Orality and Literacy
in Buddhist Practices among Shan

研究代表者

村上 忠良 (MURAKAMI TADAYOSHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：50334016

研究成果の概要（和文）：東南アジアの上座仏教徒であるシャンの仏教書が、口承と書承の両面を持つ仏教実践の一つとして継承されてきていることを明らかにすることができた。特にタイ国北部では、仏教書の朗誦をする在家知識人のなかで、ミャンマーのシャン州から移住してきた者が多いことに注目し、タイ国内で若い世代へのシャン文字知識の伝承が困難な状況にあるなか、ミャンマー出身者がシャン文字文化の担い手となること、また教師として文字知識の教授を行っていることを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This research indicates that Shan, Theravada Buddhists in Southeast Asia, carry on the tradition of Buddhist texts (manuscripts) as the practice of both orality and literacy. By focusing the activities of lay intellectuals, it shows that certain number of immigrants from the Shan State of Myanmar to Thailand take the role of readers (reciter) of the texts in Buddhist rituals; they instruct Thai-born Shan how to recite the text as master or teacher; so it would not be possible to keep up the tradition of Buddhist texts without the immigrant intellectuals in Thailand.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 ・ 文化人類学・民俗学

キーワード：シャン、仏教、在家知識人、口承、書承、越境、タイ国北部

1. 研究開始当初の背景

スリランカ大寺派の伝統をひく東南アジアの上座仏教においては、パーリ三蔵経典が広く共有されている。これらの経典は仏教の教えの精髓としてそれぞれの地域において聖典として継承されてきた。また仏教書（仏教の教えに関する書物）とされるものの中には、パーリ語文献以外に民族語で書かれたものがあり、多くの仏教徒にとってはパーリ語経典よりも、民族語で書かれた仏教書の方がより身近な存在であった。

東南アジア地域におけるパーリ語経典に関しては、仏教学・文献学の分野で仏教教義・思想の伝承・受容過程についての研究がおこなわれてきた。また、民族語で書かれた仏教書に関しても、同上の観点から仏教学・文献学の研究が進められており、また仏教「文学」としての観点からは文学・文学史研究から研究がおこなわれてきている。

いっぽう、上座仏教に関する人類学的研究は、経典の中にみられる教義よりも、地域・国家・民族を超えて広まった仏教が地域的文脈のなかで展開する具体相に焦点を当て、人々の日常生活に埋め込まれた宗教実践を研究対象としてきた。そのため、仏教実践における文字知識やその産物である仏教書は出家経験者のみが習得できる「限られた知識」とみなされて、経典や仏教書に関わる文字知識は、その神秘性や秘儀性が強調されるか、文字知識以外の仏教の実践形態（儀礼など）に多くの関心が払われてきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東南アジアの上座仏教徒であるシャンの仏教書の運用形態を、口承と書承の関係の観点から考察することである。

従来、シャンを含め多くの上座仏教徒が有する仏教書は、先述のとおり仏教学・文献学においても、文学・文学史研究においても、「書かれたテキスト」として取り扱われてきた。しかし、シャンの仏教書をめぐる宗教実践は単に「書かれたテキスト」という存在意義を超えた運用形態を見せる。このような、具体の場面での仏教書の「読み方」、「使われ方」についての分析はこれまでの研究では十分ではなかった。

特に重要な点は、民族語で書かれた仏教書の場合、当該社会の書承文化のみならず、口承文化の要素を色濃く反映しており、口承と書承の両文化の中で形成されてきたものである。パーリ語経典から民族語による仏教書までを含む仏教書全体の文化的様態を考察する場合には、従来のテキスト分析に加え、仏教書に関わる全ての者（執筆者、写筆者、朗唱者、聴衆、出資者）の宗教実践の中で仏教書を捉えなおす必要がある。

3. 研究の方法

本研究は、従来の上座仏教圏における文献学的・文学(史)的研究の成果を参照しつつ、人類学的な調査手法（フィールド調査）を用いてシャンの仏教書の運用形態を明らかにする。

具体的には、主としてタイ国北部のメーホンソン県を調査地として、そこに居住するシャンの人々が継承している仏教書の運用形態について、聞き取り調査を行った。

【海外調査期間】

- ・2010年9月15日～9月28日
タイ国北部、メーホンソン県
- ・2011年8月24日～9月4日
タイ国北部、チェンマイ県
同上　メーホンソン県
- ・2012年8月17日～8月30日
タイ国北部、チェンマイ県
同上　メーホンソン県

【調査項目】

- ・仏教書のジャンルや使用機会について
- ・儀礼で使われる時の使用方法（書写・朗読・寄進）。
- ・仏教書を主として取り扱う在家の知識人の活動。
- ・仏教書に関わる文字知識の伝承形態。

4. 研究成果

調査の結果、以下の2点について明らかにすることができた。

(1) 仏教書のジャンルと運用形態

シャンの仏教書の多くは、シャン語で書かれた韻文体のものである。韻文体ということは、基本的には朗読されることを前提として執筆されたものである。また韻文体の仏教書でも、その内容に従って大きく分けると、主として仏教儀礼で寄進・朗読される「大きな書物」（リーク・ロン）と、在家者の家などで朗読される「小さな書物」（リーク・オーン）の違いがあり、その内容は、前者が仏教教義の解説や仏教説話であり、社会的に高い価値が置かれているのに対して、後者は民話・物語をベースとしたものであり、その楽しみ方は私的な領域のものである。

韻文体の仏教書を朗読は、だれもが行えるというのではなく、朗読のトレーニングを積んだ者のみが仏教儀礼などの機会において人前で朗読することができる。

また、仏教書の韻文の構造について、押韻

の種類は同一でも、作者によって韻文構成の形式が異なっている。そのため、熟練の「聴き手」になると、仏教書の朗誦を聴いて、作者を弁別できるとされる。

以上のことから、シャンの仏教書は、文字知識を基礎としながらも、仏教儀礼における朗誦、つまり口承文化としての側面も併せ持つことが分かる。

(2) シャン文字知識の継承と在家知識人の役割

シャンの仏教文字を取り扱う専門家である在家知識人（チャーレ）の個人史の聞き取りを行い、教育経験、出家経験、移動経歴、活動年数、活動内容などのデータを収集した。これによって、現在のタイ国歩武区部におけるシャンの在家知識人像の全体的な把握と、文字知識の伝承形態についての知見を得ることができた。

タイ国北部のシャンの人々は、タイ国への国家統合政策のもとでも、文化的独自性を維持・継承することに一定程度は成功している。仏教儀礼や寺院建築様式などは、他の地域には見られないシャン独自のものを維持・継承し、タイの仏教文化の多様性をあらわす証拠として社会的にも高い評価を受けている。この背景には、この地域の観光産業の目玉として育てていきたいという政府や地方自治体の思惑が背景にあるのであろう。

しかしそのいっぽうで、言語的な面ではタイ国への統合の度合い、現代タイ社会への同化の度合いが進んでいる。日常的なコミュニケーションの言語として（つまり地方語として）シャン語が会話レベルでは使用されているが、シャン文字の教育という点では、タイ語・タイ文字による学校教育の浸透から、若い世代へのシャン文字知識の伝承が困難な状況にある。寺院内教育も、見習い僧や僧侶へのシャン文字知識を体系的に教育する機関とはなっていない。

このような状況下で、タイ国北部の仏教書を中心とするシャン文字文化は衰退の傾向を見せているようである。しかし、在家知識人への聞き取り調査をすると、以下の点を明らかにすることができた。

- ・壮老年人を中心に依然として仏教書の朗誦や寄進といった仏教実践が継続して行われていること。

- ・在家の知識人の中でミャンマー側からタイ国北部へ移住してきたものの割合が高いこと。

- ・仏教書をめぐる実践において、ミャンマー出身の在家知識人が主導的な役割を担っていること。

- ・ミャンマー出身の在家知識人が教師となつて、タイ国内の壮老年の在家者に文字知識の教授を行っていること。

- ・そして、このような朗誦の師弟関係は、寺院内教育や学校教育といった制度化された教育のなかではなく、個人と個人の無図日付きの中で継承されていること。

(3) まとめと展望

本研究では、シャンの仏教文書は口承性の高い書承文化であることの全体像を明らかにすることができた。口承を前提としている以上、シャンの仏教書は、それを使用する・必要とする人々の実践と切り離して独立して考察することはできない。書承とは人間の言語活動を文字化（可視化）し外在化し、物象化することで伝承することであり、また口承とは言語活動を実践する身体性に関わり、人間の身体に内在化された「ことば」の発露である。シャンの仏教書をめぐる実践は、まさに「ことば」をめぐる身体性と物象性、内在性と外在性の交差する場となっている。

このような口頭での上演を含んだ書承文化としてのシャンの仏教文書の実践は、以下の4つの要素によって成立している。

- ① 韻文として書かれたテキスト。
- ② テキストが記されるシャン文字と、写本や印刷本といった媒体。
- ③ テキストの口頭上演をおこなう朗誦者。
- ④ 朗誦の聴衆。

本研究では①についての基本的な情報の収集と、③についての具体的な情報を収集し、シャンの仏教文書の運用に関する口承と書承の関係を明らかにすることができた。

今後は、個別のテキストにおける口承と書承の詳細な関係の解明（①）、テキストを媒介する「モノ」としての仏教書への注目（②）、さらに仏教文書の文化を底辺で支える聴衆の役割（④）を考察していく必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 村上忠良、2013、上座仏教徒の積徳行に関する試論—タイ北部シャンの事例より、兼重努・林行夫（編）、功德の観念と積徳行の地域間比較研究に向けて（CIAS Discussion Paper Series No. 33）、京都大学地域研究統合情報センター、pp.24-30.（査読無）

- ② Tadayoshi Murakami, 2012, Buddhism on the

Border: Shan Buddhism and Transborder Migration in Northern Thailand, Southeast Asian Studies, Vol.1, No.3, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, pp.365-393. (査読有)
<http://hdl.handle.net/2433/167314>

③ 村上忠良、2012、越境する在家知識人の活動—タイ国北部の国境地域のシャン文字知識の継承、片岡樹（編）、聖なるもののマッピング—宗教から見た地域像の再構築に向けて、CIAS Discussion Paper No.26、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 36-42 . (査読無)

〔学会発表〕（計 2 件）

① Tadayoshi Murakami, 2011, Buddhism on the Border: Cross-border Migration and Shan Buddhism in Northern Thailand, Joint Conference of the AAS & ICAS, 2011.04.01, Honolulu, Hawaii, USA.

② 村上忠良、2010、タイ北部におけるシャンの文字文化と仏教実践、日本文化人類学会第 44 回研究大会、立教大学、2010.06.12

〔図書〕（計 1 件）

① 奈良康明、下田正弘、林行夫（編）、2011、佼成出版社、静と動の仏教—新アジア仏教史 04 スリランカ・東南アジア、525 頁（担当：タイの仏教世界、pp.212-259.）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 忠良 (MURAKAMI TADAYOSHI)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：50334016